

## ネコ

埼玉県 本庄東高等学校附属中学校 2年  
今泉 光翔

中学校の同窓会から帰ってきた母が、ネコというニックネームの友人について語ってくれた。母とネコは、小学校では五年間、同じクラスだったそうだ。中学校ではクラスは違ったが、時々話をするということもあったと話してくれた。

久しぶりに会ったネコは、医師になっていた。ネコは、わんぱくな男の子だっただけに友人たちも母も驚いたそうだ。ぼくは、なぜ『ネコ』と呼ばれていたのか不思議に思った。

「ネコは、新学年になって教科書が配られると、真ん中辺りを開けて、鼻を近づけて、匂いを嗅ぐんだ。すべての教科書にそうするんだよ。」

母は、当時、その様子を変だなど思っていたが、誰にも言わず黙っていたそうだ。同窓会では、そのことが話題になって、

「新しい教科書の匂いを嗅いでいた。」

と、皆が気付いていたこと、それを忘れずに覚えていたことで、盛り上がったそうである。

「医者になったとはねえ。カルテの匂いも嗅いでいるのかなあ。」

と、友人の一人が言っていたと母が教えてくれた。

ぼくは、違うと思った。カルテの匂いは嗅がないような気がした。医者が患者の前で、カルテの匂いを嗅いだら、それはそれで変だからというものもある。でも、新しい教科書とみんなが触れたカルテというのは、なんだか違う気がした。

ぼくが小学生だった頃、四月の始業式の日、クラス替えと担任発表の衝撃から開放されると、次にやってくるのは、教科書の配布だった。ぼくは、前の席の子が自分の分を一冊抜いて、渡してくれる教科書の重みを確かめ、期待と不安を入り混じえながら教科書を必ずペラペラとめくった。見たこともない記号、前学年より小さな字、少ない絵。この内容をこれから勉強するのか、果たして自分は全てを習得できるのだろうかと思う。真新しい教科書は、誰にも開かれた跡もなく、ぼくが初めて開き、ページをめくる。その瞬間に、なんとなく、その教科書がぼくのものになった気持ちになる。きっと、ネコはこの時の匂いが好きなんだろうと思った。どんな匂いがするのだろうか。

ぼくは、理科が好きなので、理科の教科書をめくって、写真を目で追う。これから習うだろう生き物や実験を見てワクワクする。楽しみが増えた感じがする。次に国語の教科書を見て、こんなにたくさんの難しい漢字を覚えられるのだろうか、不安になる。

でも、一年後、ぼくは必ず成長している。新品だった教科書には折り返し目がつき、角は破れ、中は書き込みされている。しかし、教科書をめくって見ただけで、

「ああ、これ、やった。覚えている。」

と言えるように、きつとなっている。ぼくに知識という豊富な栄養を与えてくれた教科書は、一年でその役目を終える。でも、教科書は、どの本よりもぼくに寄りそい、生活

を共にしてきた感じがする。

父と母は、生まれも育ちも違う県であるが、小学生だった頃、同じ国語の教材の物語を習ったことがあると話をしていて。今では、その物語は、ないらしい。教科書は、その時代に合わせて進化していると言っていた。

父と母が、幼い頃に学習したことを覚えていた印象深い教科書。違う学校を卒業しても同じ内容を学習したという親近感をわかせてくれる教科書。ぼくを成長させてくれる教科書。これから先も内容が発展していこう教科書。いつもあたり前のように手渡される教科書の存在の大きさに気が付いた。

ぼくは、ネコは小学校のあと、高校を卒業するまで教科書の匂いを嗅ぎ続けたのではないかと思う。これから自分のものになる教科書は、まだどれも同じ匂いがし、一年後、その匂いは、自分独特の匂いになっているのではないか。そんな気がする。

ぼくは、新しい教科書もらった時、匂いこそ嗅がないが、丁寧に名前を記入する様になっている。これから、どうぞ、よろしくの気持ちを込めて。一年後に、その名前を見た時ワクワクした期待感を思い出すように。